

北海道家庭学校寮長 藤田俊二年譜・補遺 — 自立援助ホーム「ふくろうの家」の立ち上げと最晩年の半年 —

河原国男

A Supplement to the Chronological Record of Syunji FUJITA's Life: A Teacher at the Reform School 'Hokkaido Home School'

Kunio KAWAHARA

1. はじめに

本稿はすでに発表した筆者「北海道家庭学校寮長藤田俊二年譜」(『宮崎大学教育文化学部紀要 教育科学』第 27 号、2012) の補遺に相当する。同論文では、藤田 (1932-2014, 昭和 7- 平成 26) の生涯を 2012(平成 24) 年まで記述した。

本稿では、この 2012 年論文について、とくに 2 点を補った。

一つは、家庭学校在職 (1963-1993, 昭和 38- 平成 5) の後、2005 (平成 17) 年函館市内の自立支援ホーム「ふくろうの家」の立ち上げに繋がる、1990(平成 2) 年の事実である。2015 (平成 27) 年 3 月 21 日、同ホーム長 (当時) 高橋一正 (1952-, 昭和 27 年-) 氏からホームで聞き取った史実について記載した。わずかな断片的ではあるが、北海道家庭学校退職後の社会的活動の成り立ちにかかわる発端的史実で、「ふくろうの家」の立ち上げ前史を伝える。この 1990 年に記述とともに、関連する 2004 (平成 16) 年以降について記述した。なお、「ふくろうの家」の開設の経緯、具体的には、名称、地域住民との関係、法人格の取得、運営の実態、支援、ホーム長としての思いなどについては、高橋一正「自立支援ホーム『ふくろうの家』」(道南の社会教育実践集編集委員会編『いきいき道南— 道南の社会教育実践集—』2008 年) に詳細にまとめられている。

もう一つは、最晩年半年の事実に関する。これについては、次の二つの時期に、本稿では着目した。

1) 闘病の時期。筆者河原は、2014(平成 26) 年 5 月 10 日、函館病院に入院中の藤田を見舞った。そのおり、病床の藤田から 2 冊のノートを手渡された。A4 版の大学ノートに黒のボールペンで記された日記である。1 冊は、2014 年 3 月 10 日～3 月 20 日までで 34 頁、もう 1 冊は 4 月 5 日～4 月 12 日まで 13 頁で、後者については「再開日誌」と表紙に記されている。2 冊ともに同時代の社会状況、とりわけ北海道泊、青森県大間、鹿児島県川内、それぞれの原発稼働、再稼働反対住民運動に関する動向を大きな文字で記している。前者には、新聞の切り抜きも貼付されている。2 冊ともに、こうした同時代状況への関心とともに、病床でのみずからの身体の

不調、衰弱の状況、見舞いに訪れる知人、そして看病する家族（セツ子夫人、函館市在住の二男節男とその嫁淳子）に対する感謝の思いなどを記している。その一部について、本稿で掲載した。

2) 入院闘病するその直前に相当する時期。前年の2013年11月4日5日に、河原は北斗市千代田の自宅を訪問し、「年譜」補遺を作成している研究状況を藤田夫妻に報告するとともに、研究的な関心をもって、数名の寮生の日誌記述を紹介しつ、石上館での日々について振り返ってもらった。その内容の一部は、ビデオ映像で記録してある。

なお、2004年以降の記述において、部分的に再録するとともに、若干加筆補充した。おもに晩年十年の生涯に関する事実を、本稿では補遺として記述するものである。

残された課題について、あらかじめここに2点、指摘しておこう。

1) より客観的に綿密な年譜作成について。この補遺においても、とくに筆者（河原）宛書簡や筆者との直接的な対面によって、また、おもに内面の意識、精神、判断に着目することによって、藤田の軌跡を辿っている。そのことは精神的側面を明らかにする一方、作成された年譜に課題を残す。藤田の記憶とは別に年譜にかかわる客観的な事実確定の作業をさらに継続的に進めることが、今後期待される。

2) 年譜が示す生涯に対する考察について。生涯とともに、寮長としての— 家庭学校在職中に限らない— 藤田の教育思想、教育実践も明らかにすることが、今後の課題として重要であろう。それらの解明を経た後、生涯の主題、通底する問題意識、方法態度などについて、筆者は考察するつもりである。この本稿においても、生涯かかわる総括的考察はおこなわない。

2. 年譜

1990（平成2）58才

3月13日の日誌記述をもって、石上館に属する寮生一人一人についての記述は、最後とする。この時点での石上館寮生徒は11名。

3月17日、石上館寮長職を捧 一に委ねる。以後は、楽山寮の寮長兼教務部長にあたる。

この年の秋、教務部長藤田は、道立大沼学園の蛸雪寮長高橋一正（1952- , 昭和27- ）の訪問を受ける。大沼学園卒業後の「アフターケア」のことも話題になる。そのおり、実社会にふれながら自立力をたくわえる支援施設の先行例として、東京都世田谷の青少年自立援助ホーム「憩いの家」（1967年開設）のことに話が及ぶ。高橋は大沼学園着任（1976年4月）前、武蔵野学園の研究生として1975（昭和50）年夏、北海道家庭学校の洗心寮で実習したおり、藤田と面会していた。

2004（平成16）72才

3月、函館児童相談所指導課長（札幌市の向陽学院の元寮長）鹿野（しかの）誠一、大沼学園の指導課長としての高橋一正（当時51才）と、函館市内で藤田は話し合い、すでに全国各地に開設されていた「自立援助ホーム」の必要性と財政補助策についてあらためて確認する。この時、鹿野と高橋との間で、藤田が代表になることが相談されていた。その年の10月11日に2名の入居（函館市若松町）を受け入れる。この時、全国から会費および寄付金は総額で450万に達した。藤田は、開設に向け支援を募るため、全国の知人に宛てて毎日7、8名ずつ4、5

百名に手紙を出した（高橋一正証言）。

2005（平成17）73才

8月、上磯町民生委員協議会第2ブロック講演会「特色ある少年達と交わって」。

9月「ふくろう通信」第1号、発行。「ごあいさつ」において藤田は、「目立たないように、目立たないようにしながら、いつの間にか道南に欠かせない存在になっている自立援助ホームでありたいと願いつつ」と記している。

10月11日、青少年自立援助ホーム「ふくろうの家」が開設される。全国で28番目。運営する「青少年の自立を支える道南の会」の立ち上げに藤田はかかわり、初代代表となる。同ホーム同月開設（函館市若松町。初代ホーム長は、安藤幸紀）。開設時の地域住民との関係について、高橋一正は、次のように記している。「ホーム開設前に代表を中心として近隣地域に挨拶回りをしたが、普通の家庭の転居と違うものを感じとったか、よそ者を受け入れることへの警戒心がありありと伺えた。…しかし、代表やスタッフの地道な草取り、清掃活動、笑顔の挨拶を繰り返すことで少しずつ変化していった。…藤田代表は、近所の家庭菜園の土作りの指導に出向くこともあり、2年余りのあゆみの中で、着実に地域の中に根を張ってきたと言える」（高橋一正「自立支援ホーム『ふくろうの家』」前掲書、p.44）。

11月、東京都世田谷区の「憩いの家」の元寮母三好洋子が、函館市で開設記念講演。三好を講師にすることを藤田が提案する。

11月、ルーテル市ヶ谷センターで開催された厚生労働省・東京都・全国児童自立支援施設協議会「児童自立支援事業105周年記念大会」で、藤田は記念講演を行う。演題は「息の長い仕事でありたいー自然・労働・人生の賛歌の回復（北海道家庭学校の教育について）-」。

2006（平成18）74才

1月、東京都立誠明学園で講演「北海道家庭学校で暮らした30年。そして今」。

2月、北斗市総合文化センター「かなでー」で講演する。

2月、北斗市誕生とともに、大野町教育委員会委員を辞す。

3月、「ふくろうの家」開設半年にあたって、入居した少年5名一人一人について紹介する便り（ワープロ印刷）を支援者に届ける。家庭状況、ホーム入居までの経緯、入居の決定、入居後の本人の努力や勤務の状況などについて、藤田が説明している（資料1）。

6月29日、「道南の会」NPO法人設立にむけた設立総会開催、会長に選出される。

7月、北斗市大野の自宅2階に保管した在職中日誌全部を宮崎大学教育文化学部教授の河原に託し、送付する。「感無量。なんともいえない気持です」と記す（河原宛書簡、2006.7.30 北斗北消印）

2007（平成19）75才

1月、「道南の会」はNPO法人として認可される。同時に藤田は理事長に就任する。

5月、高橋一正が、大沼学園を定年前に辞し、2代目ホーム長に常勤として着任する。このことについて、藤田は次のように記している。「道立大沼学園を早期退職（54才）した高橋一正さんが自分から手を挙げてふくろうの家の専任ホーム長に就任しました。専任ホーム長といっても給料は雀の涙、おそらくは道職員時代の年収の1/4以下であることを承知でとびこんで来た男の決断に、この男と30年来の友人であることを深く誇りに思いました」（河原宛書簡、

2008.5.9)。

2008 (平成20) 76才

1月「ふくろうの家」若松町からの場町への引っ越しに伴い、藤田は近隣住民に挨拶回りする。

4月「道南の会」定期総会で、藤田は会長職を退き、名誉会長に就任する。

6月、児童家庭支援センター（千葉）で講演する。

10月、母藤田ミツエが100才で死去。

2009 (平成21) 77才

5月、「79年の歳月を経て風雪に耐えるも老朽化」（「趣意書」）した祖父藤田市五郎の頌徳碑（資料2）を補修するという目的から大野町千代田地区で寄付金募集が始まり、近親者として地区内の住民に協力を求める立場になる。ただし、藤田俊二自身は役員ではないこともあり、「頌徳碑補修工事発起人会」25名のなかに入っていない。

その趣意書に係わって藤田は記す。祖父市五郎から「逃れようと生き続けた部分が僕にはあり、それは今現在もあり、…個人としては尊敬しても大地主として大野に君臨していた『存在』そのものへの嫌悪感は昭和22年頃からそれは今も消えていません。…僕が太宰治や坂口安吾に引かれるのは、元地主の末裔たちの生き方のひとつのかたちとして見ている面もあり…」（河原宛書簡、2009.5.23 函館消印）。

この月の末、藤田は前便に続く書簡を河原に送る。「祖父の北海道の農業、特に道南の力から広めて行った農業発展の功績には深く頭をたれつつも、…」と記して後、「昭和26、7年だったか僕は日本共産党函館地区委員会の古い友人たちから『藤田俊二はプチ・ブルの残滓で生きている』と徹底的に批判された時に僕は必死で反撃しましたが、的を射ている部分があったから僕は、大野を脱出して歌志内へ向かったという思いがたしかに今もあります。〔改行〕僕は歌志内で労組の人たちと社会当共産党の別などなくつき合う様になり、大野では全く知らない、知らなかった炭坑労働者の深い思いの様なものに少しづつ触れて、軽々に立ち入ってはいけない重い人生の数々の前に立ちすくんで、歌志内を立去ろうと決意した日々のことを今改めて思い出しています」。そして、『森崎和江コレクション ー精神史の旅ー』全5巻（藤原書店）を読み始める。「『産土』『地熱』『海峡』『漂白』『回帰』と5巻に分けての森崎和江の人生と仕事、筑豊の炭坑を自らの出発地として生まれ故郷の朝鮮半島と朝鮮半島の人たちとの共生を誠実な出発点とした僕よりも6才年上の人生の軌跡を追って見ようと思ったからでした。昭和36年夏から翌年秋まで歌志内の書店で予約購入を続けた『現代史資料』全巻、ゾルゲ事件、アイヌ、部落、兵士、と切り口は多様ですが、あの時の緊張感に満ちた読書とこれから始まる森崎和江の軌跡を自分自身の人生と照合しながら生き続けようと真剣に思っています。〔改行〕近々に読み終わった『近代日本の夜間中学』三上敦史（たまたま僕の友人の娘の夫であることを読んでいた途中で知り、びっくりしました）著、今夢中で読んでいるのは、『長沼事件平賀書簡』、僕にとっては、『読むことは生きること、生きることは読むこと』、むしゃむしゃと御飯を食べる様に本を読み続けています。8月で77歳、我が一族が命終わるか記憶失うかはほぼ80歳前後、生命力と自然力とのせめぎ合いのはざまを少し楽しみながらの日々が続いています」と記す（河原宛書簡、消印不鮮明、2009.5.28 受け取り）

6月、森崎の本に触れ、炭坑生活を回顧する。「時代も地底の条件も状況も違うのに、一字一句に地底で働いた者の知る急迫の真暗闇、いや真黒闇の労働の笑いや怒りがひしひしとつた

わってくるこの仲間同士の感覚、…本当に炭坑で働いてよかったと今にして改めて思っています」(河原宛書簡、2009.6.8 函館消印)

6月14日俊二は藤田家本家によばれて、本家の藤田昌平(市五郎曾孫、61才)、藤田正裕(62才)、藤田一美(62才)とともに、祖父市五郎頌徳碑補修工事費用負担の件で話し合う機会を持ち負担案について提案する。本家であり、現地区会長職にある昌平とともに、祖父の姿をはっきりと記憶する俊二も一定額を拠出すという提案で、三名も賛同する(河原宛書簡、2009.6.15)。祖父に対する個人的な思いは「封印」しての話し合いで、「血を受けている者として淡々と子孫であることの誠実な生を刻んで行くつもり」と藤田は記す(河原宛書簡、2009.6.17 千代田消印)。

2010(平成22)78才

7月、函館少年刑務所にて篤志面接委員を務める(2012年11月まで?)。

2011(平成23)79才

河原によってデータ入力された寮生(『北海道家庭学校寮長藤田俊二の実践記録一覧』『宮崎大学教育文化学部紀要 教育科学』第31号、2014、整理番号74)についての藤田の日誌記録を「拝受」したことを記した書簡で、この寮生と年齢の近い2人の子息、剛太郎、節男について、藤田は次のように記述する「2人とも石上館で暮らした高校を卒業するまでの難渋と困難の日々を家内には時々述懐する様ですが、僕には絶対にかつても今も絶対に口にしません。男同士の(父と子の)何かなのか知りません。ですから僕は息子たち2人と死ぬまで家庭学校のこと、その他様々な世間に流布する少年問題や家庭のことなど(大袈裟に言えば教育問題のすべてかも知れません)を息子たちと語り合ったことなど一度もないままに死ぬことになるかも知れなあと、この頃しみじみと考ることがあります。僕に対する批判も意見もたしかにある筈と思いながら時々考いこむこともあります。そして、「僕は元気に今を生きています」、「他とかかわる部分がなくなった分だけ猛烈に本が読めるのです」と藤田は記す(河原宛書簡、2011.10.2 函館消印)。『コレクション戦争と文学』全20巻、集英社、をこの春予約する。

2012(平成24)80才

膨大な日誌のデータ入力作業を進め、どの寮生についての日誌を入力するか、その選択に迷っている筆者(河原)の「印象深い少年がいれば、何名でもご教示」下さいませんか、という願い出(藤田俊二宛河原書簡、2012.3.26)に対して、藤田は次のように書簡で応答した。「先便で『心に残る少年云々〜』とありましたが、昨日は言葉にするのができませんでした。長く暮らした少年、途中で姿を消した少年、苦労した少年、全くすることのなかった何故家庭学校に来たか?今も首をかしげる少年も全部含めて、一人一人全部心に残り続けています。63才の最年長元少年、糖尿病の悪化で呻吟し続けている元少年、自分と同じ様に、息子を連れ連れて放浪している元少年、会社を興して成功した元少年、息子が高校を卒業して警視庁と国鉄に合格した喜びののでんわをよこした元少年、泊原発の再稼働をただただ待っている元少年等々の140を超える元少年たちの自他から伝わってくる消息の数々は今の日本の切り口にもじんとし続けています」。そして、次のように藤田は記した。「僕は元大野町教育委員長名で案内をいただいていた地元小学校の年間行事(入学式、運動会、学芸会、卒業式)出席を80才を機に校長に心境を

告げて出席をやめることにしました。思い出してみると、…(中略)…18年余、公的な場での背広もネクタイの着用を終えました。なんだかしんみりした気持です。僕が昭和13年に入学した時の担任は僕の母藤田ミツエでした。そして戦争、敗戦、様々な変転苦悩の末に拾って頂いた家庭学校、一緒に暮らした少年たちと、母と、父と、家内セツ子に感謝しながら僕はこのまま90代までは生きて行く様な気がしています。草々」(河原宛書簡、2012.4.7 函館消印)

2013(平成25)81才

11月4日5日に河原の訪問を受ける。河原は、寮生の日誌のなかでもとりわけ個性とユーモアを溢れる記述(日誌整理番号71)を読み上げながら、少年のなかの「ユーモアの力」を期待し、喚起する実践について指摘した。そして、寮生一人一人について、日常の場面場面に即した藤田の具体的な個性把握に河原はふれ、創設者・校長としての留岡幸助からきわだって区別されるのではないですか、と問いかけた。それを受けて、夫人が「寮長って、たのしいもんですよ。30年間でもう嫌だと思ったことは一度もない」と語ると、藤田は「そうだな」と同意した(資料3)。その一方、河原のこうした問いかけから離れた形で、藤田は寮生のなかのアイヌ出身者たちのことにみづからふれ、「立ち上がれないような差別」を受けてきたこと、「今もなお苦しんでいること」について思いを語った。河原が用意した石上館寮生の名簿一覧(実名記載)から、アイヌ系である生徒を一人一人指し示す。『もうひとつの少年期』にも、その出自であることの悲しみは伏線として記しているともいう。書斎から瀧口夕美『民族衣装を着なかったアイヌ』を取り出し、ぜひこれを読んで下さいと薦めた。書斎の机には、原発関連の書籍が積み上げられる。退職後、毎日大学ノート(A4版)につけている日記には、新聞の切り抜きが差し込まれている。少年たちの日誌のように、厚みをもっている。その日記にもし名前をつけるとすれば、という河原の問いに「漸進録」と答える(資料4)。80才を過ぎて、「人生は奥深くていいもんだ」、「人生は長くても使い勝手がある」、「学校出なくともなんとかなる」と繰り返して語る。あと10年生きて、90才まで生きたいともいう。在職期間の30年を挟んで、前後に30年となる。その人生に「感謝」の気持ちをもっていると伝える。来年、家庭学校は百周年記念式典が開かれるが、自分は行かない、という。在職時同僚だった渡辺伊佐雄先生、捧一先生が退職されて以後の家庭学校は、自分が知る家庭学校ではないとの思いを藤田は語った。

後日、河原からの礼状に対する返信(11月10日付)で、藤田は、セツ子夫人の健康状態に気遣いしつつ、次のように記す。「昨日はセツ子の再検査(癌手術の予後経過)要注意はこれからは続きますが1日1日を2人でクリアして行きます。様々な薬のお陰でセツ子は随分元気を回復して来ましたが、反面の副作用も深化して来て僕はほぼ24時間をセツ子の視野、聴野(?)の中にいます。僕も弱体化はして来ていますが、90代は視野に入ってきました。文字を読む量は60代を凌駕しています。軽々に100歳などという言葉は使用できませんが、心中に90歳を意識し始めたことはたしかです」。

12月。便箋1枚と12月12日10日付北海道新聞(夕刊)から切り抜かれた「樺太の証言復刻」に関する記事(引き揚げ者約1700名が犠牲になった終戦直後の三船遭難事件)を河原に送る。便箋には、実母がこの事件で亡くなった寮生(日誌の整理番号9)の記録にこの切り抜きを添付してくださいとの依頼とともに、この寮生に「付添って来て涙をこぼしていた記憶が今も深く残っています」と記している。このこととともに、「もう一人悲しいことに」として、初期

の向陽寮時代（日誌には記されず）のN.S.にふれ、「病気で亡くなりました。妻君と息子さんからの喪中ハガキに涙がこぼれました。これから正月、多様な正月の挨拶が年賀状で電話で来ます。81才～これからも寮長の仕事が続きます。敬具」と記している。

2014年（平成26）81才

1月1日、かつての同僚軽部晴文（1979年6月着任し、平和寮・柏葉寮を担当し、2007年9月1日退職）より、今度の4月より家庭学校に復職するとの知らせを藤田は年賀状より知る。ただちに軽部に電話し、「良かった。良かった」と伝える（軽部晴文「藤田先生の思い出」『青少年の自立を支える道南の会会報』ふくろう通信特別号、2014年10月10日）。

3月14日MRI検査を受ける。

3月16日、癌発見の前の大学ノート（表紙に「2014.3.10～」の記載）には、次のように記されている。「忙しい春になって来たが本を読む量はむしろ多くなって来た。短い時間に本を読む時間を継ぎたして行けば結局多くなるのだ。自分で自分の時間を多様に設定できる分暮らしの自由さは今までの人生ではできないことだった。これから生命終るまでの日々の時間を大切にしようと思う。〔改行〕セツ子が少しづつ気力と体力を増して着た様な気がする。セツ子が元気を盛り返すのは僕がセツ子に心配をかけないことだと改めて痛感する。…」(資料5)。
3月20日胃の内視鏡検査を受ける。食道癌が発見され、即入院市、手術する。函館市立病院。
3月23日函館消印の河原宛封書で「3月20日入院即手術しました。のどの癌で2、3年前から変調を感じていました。これからのことは全く判りませんが少しづつ元気になって来ました」(全文)とメモ用紙に記した。封書裏面には、藤田の住所、氏名、電話番号を表記した氏名印の脇に病院名が記載されている。

4月、一旦退院（4月2日）するも、再度入院（4月12日）。胃ろうの手術を受ける。

4月7日、大学ノート（表紙に「再開日記 2014.4.5日」の記載）の「セツ子 デーサービス」と題したページには、あらためてセツ子夫人に対する感謝の思いを記述する（資料6）。
大学ノート（同上）の「4月8日～4月12日」と日付のあるページには、病状とともに、長年の同行者（高橋一正、家村昭矩）、家族に対する感謝の思いを記す（資料7）。

5月、放射線治療を受け、小康状態になる。

6月、石上館（1974年10月落成）が改築に伴い解体される。

6月25日市内の飯田内科クリニックに転院。ショートステイ。

7月29日セツ子夫人に、「今日行く」という。「どこへ行くの？」と問うと「しべつ」（死別か、地名の土別かの意味―注）と二度いう。二男節男の嫁淳子も同席。「私も行く」とのセツ子夫人の返答に「うん、ありがとう」と応える。藤田セツ子「別れ」（『青少年の自立を支える道南の会会報』ふくろう通信特別号、2014年10月10日）、同日、午後6時50分、逝去する。享年81。
10月「青少年の自立を支える道南の会」が、会報「ふくろう通信」特別号として「藤田俊二さんを偲んで」を発行する。「別れ」と題した藤田セツ子の一文をほか、北海道家庭学校軽部晴文、元石上館寮長捧一、元憩いの家寮母三好洋子、「ふくろうの家」ホーム長高橋一正、元北海道家庭学校長小田島好信、元岩見児童相談所職員（名寄短大特任教授・北海道家庭学校理事）家村昭矩等の諸氏が寄稿する。

資料 1.

「ふくろうの家」開設に係わる全国の支援者に宛てて、入居した少年一人一人について説明する文書。2006（平成 18）年 3 月発送。「これからの日々が本格的な取り組みになるという思いの元」と意気どみのほどが記されている。文末の手書きは、日誌送付についてふれている。

資料 1-1

前略
 昨年中は温かいご支援を頂いて本当に有難う御座いました。
 青少年の自立援助ホーム「ふくろうの家」を開設して半年余りたち、試行錯誤を繰り返しながら一つの軌道に乗りました。
 これからの日々が本格的な取り組みになるという思いの元、昨年 10 月からの入居少年の動向、様々な経緯、相談を受けて対応した、現在も対応している 1 人 1 人についての概略を説明させて頂きました。

平成 17 年 10 月 10 日に開設して即日、二人の少年が入居しました。

1. A 少年
 道内の養護施設出身。
 高校卒業後関西方面に就職するも、慣れない生活と暑さから望郷の思い募りその年の夏に帰郷。母親の住む函館に移り住みました。
 ホーム入居後、現在市内のコンビニの深夜勤務についています。
 ホームから勤務先のコンビニまで約 3 キロメートル。この大雪の冬も自転車で通いつけて無欠勤。将来料理人になる事を目指し、懸命に働いています。真剣な姿には頭が下がります。
 音楽と小説が両輪の趣味です。
 この頃笑顔が美しくなってきました。スタッフとの会話も増え、ほとんどの時間をスタッフと過ごすようになってきました。
 自立が近い、明るい予感がします。

2. B 少年
 道内の「児童自立支援施設」出身。
 生活態度の真摯さが施設から信頼され、近くの店に園外実習に通っていました。
 ホームの開設を機に、「児童自立支援施設」「就職決定した料理店」「家族」の三者が協議してホームに入居しました。
 魚さばきもめきめき上達、仕事への気迫もあり、まもなく厨房の皆さんからも可愛がって頂くようになりました。入居して二ヶ月余りの頃、早くも先輩料理人から新しい包丁をもらいました。包丁を私どもに見せたときの嬉しそうな表情が非常に印象的でした。
 しかし、店の勤務は午後四時から十時、ホームから店まで約 4 キロメートル

資料 1-2

あります。この冬の大雪の道を自転車で通いつけるのは、16 歳の少年には過酷だったと思います。
 途中で警官に自転車泥棒と間違われ、不審尋問を受ける事数度、その度ホームに帰ってくるのは深夜になりました。B 少年の悔しそうな表情が今も忘れられません。私どもも、なんとも言えない無力感にとらわれたものでした。文章が過去形になっています。

B 少年は現在別の保護施設に入っているからです。
 ホームで暮らしたのが二ヶ月、下宿に移って一ヶ月、一月に入って B 少年は下宿からも店からも姿を消しました。そして下旬、函館市内近郊で起きた少年グループ七、八人による自動車窃盗事件の被疑者として現行犯逮捕されました。現在、正式処分決定を待っています。

私どもは事件の詳しい内容や、B 少年がどの程度の位置で関わっていたのかを知る立場にありません。が、拘留期間の異例の長さから、「保護観察」より「少年院送致」になる可能性が高いただろうと、司法機関の決定を見つめています。
 B 少年が働いていた料理店では、本当に彼を大切にしてくださったし、可愛がって頂きました。彼自身も深く感謝している事を、先日の手紙にも切々と書いています。
 B 少年の切ない家族状況、中学一年の頃から接してきた同郷の大人として、深い思いがあります。

3. 四月から 1 人の少年、C 少年が入居します。
 道北の町の役所からの電話で始まりました。
 「一緒に暮らしている養父からの虐待と暴力で、友人宅や納屋などを泊まり歩いて、ほとんど食事も取れてません。鎖骨も折れているらしく、目も随分悪くなっています。
 しかし、働けない状態ではありません。本人も働きたいと言っていますので、函館に行っても迷惑をかける少年ではありません」
 少年の切迫した窮状を伝える福祉課の女性の声は、遠距離だったせいもあるのせいでようやく、涙声にさえ聞こえました。私どもはただ黙然として聞きました。そして数日後に送られてきた C 少年の生身写真。
 八年前に九州で孤獨死した実父の人生も哀切の極み、虐待を加え続ける養父の人生もまた苛烈、わが子に対する夫の暴力をじっと見ているしかできない実母の悲しい目も紙背から伝わってきました。
 とにかく C 少年が安全にその町から離れる事、その一点で私どもは引き受ける事にしました。

資料 1-3

働く意気があるのだから！ 今なら身体の障害を治療しながら自立できると思ったからです。

4. 道央の町から1人の少年、D少年が家族に伴われてやって来ました。最初は両親と同居して主に両親からお話を聞き、次いで両親に座を外して頂いてD少年と向き合い、色々話して思いを聞きました。お父さんはその町の有力な自営業者の1人であり、お母さんも落ち着いた立派な方です。

D少年の兄はA市内の有名進学校の吹奏楽部でトランペットを担当、現在はソロ活動も行うトランペット奏者だそうです。D少年自身もトランペット、ピアノに堪能。「シヨバンが好きです」と話す好少年でした。

ホームに入居するしないの相談ではなく、高校卒業を前にホームの人に話を聞いて欲しいという、人生相談に近いものだったと思います。

昨年、D少年の高校で連続盗難事件が起きました。D少年が犯行を申し出て、既に受理されて落着いています。私どもは彼らも彼らも当時の事をぼつりぼつりと聞きました。ある意味幼さの残る、非連続性の事犯でした。

兄とは違う、スポーツ重視の高校の雰囲気についていけずに気後れしてしまつた、芸術嗜好のD少年。一つの反抗の形を見ました。吹雪の中、今生きている位置、生きる道筋が見えなくなっているD少年の悩みが伝わってきました。

その後、二月中旬から今日まで話し合いを重ねています。

和菓子か、魚を使わない和食料理の職人になりたい、北海道から離れた。本人の真の希望が漸く理解できて、各地在住の私どもの知り合いや友人に電話で相談、動きある毎にD少年と両親に連絡してその詳細を伝えていきます。

4月中には、希望の土地で希望の職種につけるように決めたいと思つています。

5. 去年の11月から、E少年。

1人のお母さんから電話で相談を受けました。

「来年の4月、私の息子が少年院から退院します。函館にできたというそちらのホームに是非お願いしたいと思つています。お願いします。お願いします。」

お母さんは、E少年が優しい息子である事、少年院は既に二回目であると言いました。

「このままこの町に帰ってきたら、また元の仲間には誘われて悪い事をしてしまうような弱い子です。私には、もう悪い仲間から息子を守れないのです。」

お母さんの声は切々としていました。

まもなく、少年院からE少年の手紙が来ました。

資料 1-4

「ホームの決まりを守ります。一生懸命に働きます。もう悪い事は絶対しません。是非「ふくろうの家」に入れて下さい。お願いします。」

率直な手紙には胸を打たれました。その後もE少年からの三通の手紙、お母さんからの四通の手紙と五回の電話、しかし、結局私どもは二人の願いに答える事ができませんでした。

二人目に書いた日少年へのこれからの息長い対応の必要性と、この年長少年との両対応は難しいと判断した事もありました。

もう一つ、私どもの力量ではまだ対応しきれないという、スタッフ全員の判断もありました。

一時はその少年院に向かい、せめて面接してから決めようと旅費設定までしたのですが、断念しました。

E少年は予定が早まり、三月中には退院します。

お母さんは私どもの苦衷を理解して下さいました。

「私も頑張ってみます。別れた主人ともよく話し合ってみます。」

明るく話してくれるまでになり、逆に私どもの事を案じてくれました。

E少年の件は、落着きました。

お母さんと別れたご主人、少年院を出たE少年の家族三人、今までのばらばらの家族から一つの家族に、元のように戻るかもしれないという希望を、今私は抱いています。

お母さんの手紙と、何より最後の電話のしみじみとした笑い声に、家族の蘇生が伝わってきたような気がしたからです。

以上、05年10月から06年3月まで、「ふくろうの家」の「六ヶ月史」となります。

他、「ふくろうの家」の内容照会が、道内外から十三件あった事を記して、終りたいと思います。

草々
藤田俊二

今げあまりに忙しいので、
夕月頃ウラ送り始めます。

資料 2

祖父藤田市五郎（1865 - 1943，慶応元-昭和18）の称徳碑。村内の稲作発展等に尽力した。北斗市千代田の千代田稲荷神社境内にある。2006(平成18)年7月24日、藤田俊二本人に案内されて筆者が撮影した。存命中、しかも60代半ばにして建立されたこと、俊二はそのとおり語った。

資料 2-1



資料 2-2



資料 3

北斗市千代田の自宅での 2013（平成 25）年 11 月 4 日のビデオ撮影から。セツ子夫人もすぐ傍に寄り添っていた。

資料 3-1



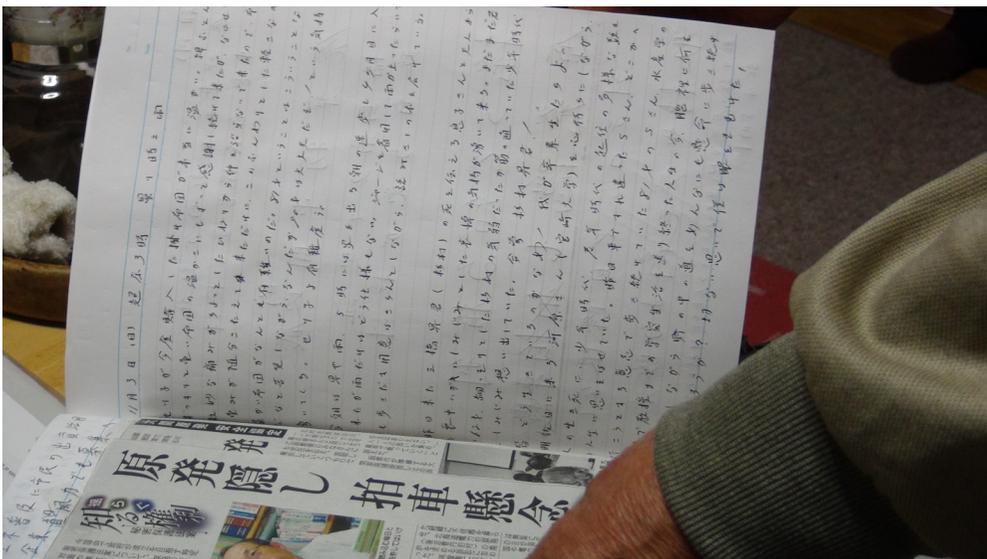
資料 3-2



資料4

大学ノート(A4版)に記された日記。2013(平成25)年11月5日、書齋に筆者(河原)を案内し、ページを開いて見せてくれた。切り抜きされた新聞記事が貼付けられている。原発の新聞記事とともに、かつての生徒の死去(62才)を伝える遺族からの葉書が届いたことにふれている。藤田が家庭学校着任当時の生徒である。「気弱だったが筋の通っていた少年時代をしみじみ思い出していた。皆どう生きているのかなあ！ 我が卒業生たちよ」と記している。

資料4



資料5

癌発見前の日記ノート (A4版)。2014(平成26)年3月10日から記されている。その日、「朝刊 大震災3年不明なお2633人」と記す。

資料5

No. _____
DATE _____

3月10日(月) 起床3時 月曜朝

此の春になって来たが本を読む量も色々多くなって来た。短い時間にも本を読む時間を確保して行くのが結局多くなるのだ。自分で自分の時間を多様に設定して自分の暮ら(自由な生活)での人生ではこれが一番いい。これからの生命終了までの日々の時間を大切にしたいと思ふ。

セツ子が少(づ)づ気力と体力を増して来た様分気がする。セツ子が元気を盛り返すのは僕がセツ子に心配をかけることだと改めて痛感する。セツ子は今日日デーサーベスの日だ。セツ子の居る日は本当に淋しい。セツ子がデーサーベスの皆さんの中でよくしてもらっていることを思ふ。本当に存難いと思ふ。ミリ母おさん、ハ軒屋中村さんのお世話から流れてくる人に対する根源的な優しさ(と酒脱な陽気な言葉)が、人真似ではかたは優しさの内には秘めたる人柄が根源に存在するから、その逆は世の中は充滿(過)である。

(朝刊)

原 登 避難
泊丹稼働論議を前に

(3)

半島「陸の孤島」重判断
経済性≒守命性 割北の地元

資料 7

最後の日記ノート。最後のページには、「原発回帰 怒りのデモ エネ基本計画 閣議決定 道庁前 再稼働 『許せない』『国民の思いに背く』 国会議員ゼロ会」と筆記されている。

資料 7-1

4月5日～ 4月12日

産 最速の変化(行くのか 行かないのか?) 見通りの中様は何か 大原理に静
 口程一生を託して 行こうと思
 渡山の方を見舞うに 来た下さ、た
 二と元から感謝(分がう、今日から) 再
 入院 放射線治療 口オベテお願
 じ(とうと思)の

武田さん、武田久美さん、
 高橋さん、家村先生、
 武田夏海さん、北湖さん、春代さん

本当に本当に有難さう御座います
 主として 節男と清さん 本当に有難さ
 うして 東京の剛太郎と 磯沼美さん、北
 風美 翔生、本当に本当に有難さう

資料 7-2

今日から始まる放射線治療、二ととと
 分がう 深く期待(分がう 二ととととと
 延びながら行きたい

断片的な日記が分がうが継続して
 いくように

記入ノル